
クリスマスに鮫

坂田火魯志

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

クリスマスに鮫

【Nコード】

N3374P

【作者名】

坂田火魯志

【あらすじ】

友人達に薦められてクリスマスにオーストラリアに来た日本人カップル。最初は戸惑っていたが過ごしてみると。オーストラリアのクリスマスを書いてみました、毎年恒例のクリスマスものです。

第一章

クリスマスに鮫

オーストラリア。この国にも当然クリスマスはある。しかしだ。

「噂には聞いてたけれどな」

「そうよね」

如何にもアジア系といった顔の二人がぼやいている。彼等は今それぞれ半袖のシャツに生地の薄いズボンといった格好だ。それで白い砂浜と青い海を見ている。

砂浜にも海にも海水浴客がいる。二人はそのビーチを見ながら話す。

「これがクリスマスってさ」

「日本と大違いよね」

「あれっ、また言ってるよこの二人」

「仕方ないわね」

ここであった。茶色の髪と目の男と赤がかった金髪に灰色の目の女が言ってきた。二人ともアジア系の二人より背が高く筋肉質である。

「だからここはオーストラリアだよ」

「今この国は夏なのよ」

「けれど日本じゃ冬だから」

「違和感があるの」

アジア系の二人はこう彼等に反論する。男の方の名前は如月健太郎、女の方の名前は三月日花枝、どちらも日本の大学生である。大学でのクラスメイトであるオスカー・オコンネルとマリー・ディブレ、今丁度二人の目の前にいる彼等に誘われてクリスマス旅行でこの国に来たのだ。

そうしてきたオーストラリアは。二人が話に聞いた通り夏だった。見ればビーチでサンタがサーフィンをしている。

「メリークリスマス！」

「だからそこはトナカイだろ」

「何で波に乗るのよ」

「普通じゃないか」

「ねえ」

しかしオスカーとマリーは平気な顔でこう言うのであった。

「僕達から見ればだよ」

「サンタさんが雪の中にいる日本とかの方がね」

「違和感あるから」

「話には聞いていたけれどね」

「それもわからないんだけれどね」

「そうよね」

健太郎と花枝は眉を顰めさせて二人に返す。

「夏にクリスマスって」

「全然信じられなくて」

「けれどワインはあるよ」

「それに御馳走もね」

オスカーとマリーの言葉はある意味において全くぶれない。

「ケーキもあるしね」

「クリームとカスタードクリームとアイスクリームの三つを乗せたクリスマスプディングもあるわよ」

「そのクリスマスプディングって話を聞いただけで」

「糖尿病になりそうだけれど」

日本人の二人が聞くと啞然となる組み合わせのスイーツだった。

「あと。七面鳥じゃないよね」

「バーベキューでしょ」

「夏だからね」

「ビーチでそれを焼いてね」

「何かキャンプファイアーじゃない」

「それ以外の何ものにも思えないけれど」

健太郎と花枝にしては本当にそうとしか思えないのだった。とにかく二人にしてはクリスマスの実感がなかった。ところがなのだった。

夜になるとだ。四人でビーチに出てだ。実際にバーベキューを食べるのだった。

他には海の幸のオードブルだった。ロブスターに貝に魚だった。オスカーとマリーは二人に対してそのオードブルの山とついでにサラダも誇らしげに出すのだった。

「日本じゃ君達に海の幸を物凄く御馳走になったからね」
「だからお返しよ」

健太郎と花枝が料理したそれを御馳走になったのである。四人の仲自体はともいいのだ。

「さあ、どんどん食べて」

「メインのお肉も焼いてるからね」

「だからクリスマスに海の幸って」

「それ自体がないけれど」

「いやいや、日本の声優さんの中にはクリスマスに納豆食べる人がいるそうだし」

「これ位は普通でしょ」

二人は日本のそうした話も知っていた。所謂ヲタク文化についても造詣が深くなっていたのである。

第二章

それでこの話を出すがだ。健太郎と花枝の返答は厳しかった。

「そんなの滅茶苦茶変わったケースだよ」

「普通はしないから」

「何だい、面白くないな」

「全くよね」

オスカーとマリーは日本人二人の言葉にまずは面白くない顔をした。

「そついうのも面白いのに」

「それがあくまで特別って」

「和食はクリスマスに合わないから」

「かなりね」

「けれどオーストラリアじゃこれが普通だから」

「食べてね」

ここではいささか強引に日本人二人に食べさせるのだった。その味は健太郎と花枝を認めさせるのに充分だった。そのオードブルとサラダを食べてだ。

バーベキューを食べる。赤ワインもだ。そのうえで四人で言い合
うのだった。

「メリークリスマス」

「楽しいわね」

「バーベキューにワインも」

「中々いいわね」

オーストラリア人二人は屈託無く喜び日本人は珍しい顔をしてその組み合わせを味わっていた。ここでも対象的な状況だった。

だがそれでも四人共そのパーティーを楽しんでいたのだった。

そのクリスマスプディングもだった。

「美味しいね」

「そうね」

「そうだろ？美味しいだろ」

「とてもね」

「うん、それはね」

「いいわ」

美味しいものは素直に認める日本人二人だった。

「物凄く甘いけれど」

「それがかえってワインにも合って」

「いいね、これって」

「美味しいわ」

「よし、気に入ってもらったら何よりだよ」

「こちらも作ったかいがあるわ」

オスカーとマリィは二人のその言葉には満足した笑顔になる。

「それじゃあどんどんね」

「食べてね」

「うん、それじゃあ明日は」

「泳ぐのね」

「そうだよ。オーストラリアのクリスマスはお昼は泳ぐんだよ」

「その次の日はね」

そうするというのがあった。まさに夏ならではのあった。

それを話してからだ。二人は笑顔で健太郎と花枝に話した。

「明日は。ビーチでね」

「気持ちよく泳ぎましょう」

「クリスマスはダンスじゃなくてスイミング」

「何かそれもいいかしら」

二人も何となく納得してきたのだった。楽しめているのでそれでいいかと思いはじめたのである。何だかんだで楽しんでいる日本人二人だった。

その翌日だった。四人はそれぞれ水着姿でビーチに出る。まずはオスカーが健太郎を見て言う。二人はトランクスタイルの水着だ。

オスカーは赤、健太郎は黒である。

「君って結構筋肉質なんだね」

「着やせする体質なんだよ」

「それでなんだ」

「そうだよ。陸上やってたし」

「そうなんだ。まあ僕はラグビーだけれど」

見ればオスカーの身体は大柄でそのうえ筋肉が目立つ。如何にもラグビーをしていたという身体つきだった。

「お互いかな」

「そうだね」

男二人はそんな話をする。そして女二人もだった。

「花枝のスタイルってね」

「ええと、胸がないから」

花枝は恥ずかしそうに言う。彼女は白いビキニでマリイはオーストラリアの国旗をモチーフにした派手な柄のビキニである。露出はマリイの方が多い。

その白いビキニから見える胸は確かに小さい。しかしマリイはその他の部分も見て話すのだった。

「だから。胸だけじゃないわよ」

「そうなの」

「ウエストだってお尻だって」

「そういうのも？」

「花枝ウエストもくびれてるしお尻の形もいいじゃない」

「けれど。マリイも」

とにかくマリイの巨大な胸が最初に目に入る。そしてそこから見るウエストもそのお尻もだ。花枝には見事なものにしか写らない。

第三章

しかしなのだ。そのマリーはまだ彼女に言うのだった。

「お肌だつて白くてきめ細かくて」

「お肌もなの」

「脚だつてすらりとして奇麗じゃない。花枝淒くいいわよ」

「だといいけれど」

「自信持つていいから」

そしてこう告げるのだった。

「充分にね。それじゃあ話はこれ位にして」

「泳ぐのね」

「ええ。準備運動も済んだしね」

四人は既にそれは済ませているのだった。泳ぐ前の準備体操は絶対だった。

「じゃあ気合入れて泳ぎましょう」

「そうね。それにしても」

ここであった。花枝は優しい笑顔になった。そのうえで澄んだ、ブルーダイヤをそのまま溶かした様なその海を見て言うのだった。

「こうしてクリスマスに」

「泳ぐのもいいものでしょ」

「最初はそんなの有り得ないって思ったけれど」

それでも今はというのだった。

「今はね。もうね」

「そうでしょ。クリスマスに海で泳ぐのもいいものでしょ」

「ええ」

その優しい笑顔でマリーの言葉に頷く。

「本当にね。そう思うわ」

「それじゃあね」

健太郎とオスカーもいる。四人で今その美しい夏の海に入ろうと

した。ところがだった。

突如としてサイレンが鳴りだ。英語での放送が入った。

その放送を聞いてだ。四人は瞬く間に顔を顰めさせて言うのだった。

「何だつて！？ 鯨！？」

「鯨が出たから泳ぐなつて！？」

「折角今から泳ごうと思ったのに」

「こんなことになるなんて」

オーストラリアの海では鯨が多い。時々こうしたことがあるのだがこの放送を聞いた四人はだ。瞬く間に不機嫌になって泳ぐのを諦めるしかなかった。

それでだ。健太郎は皆があがつていき誰もいなくなった海を見ながら呟くのだった。

「クリスマスに鯨なんてな」

「これが一番予想外だったわ」

花枝も言う。

「ちよつとね」

「そうだよ。折角泳ごうとしたのに」

「まあ気を取り直してさ」

「プール行かない？ それじゃあ」

その残念がる二人にだ。オスカーとマリーが声をかけてきた。

「近くのホテルにいいプールがあるんだ」

「そこ、誰でも無料で入られて気軽に泳げるしね」

「そこで泳いで」

「楽しもうつていうのね」

「うん、とても広いから楽に泳げるしね」

「それでどうかしら」

「そうだね。それじゃあね」

「そこで御願いね」

気を取り直した日本人二人はオーストラリア人二人の提案に頷い

てだった。それでそのプールに向かうのだった。真夏の中の汗をかいて泳ぐ楽しいクリスマス、それがオーストラリアのクリスマスである。

クリスマスに鮫 完

2010・12・2

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3374p/>

クリスマスに鮫

2010年12月5日23時55分発行